00

もう伝説のようになっている少年の頃から
私を動かし喜ばしたことのあるものを、
考えたことや、夢みたことや
祈りや、求愛や、嘆きなどにちなむ
たまゆらな、色とりどりの落ち穂を、残らず
あなたはこのページの数々に見出します。
それが好ましいものか、無益なものかは、

あまりむきになって問わないことにしましょう――
やさしく受け入れてください、この古い歌を！

私たち、年とったものにとっては
過ぎ去ったものの中にたたずむことは許されており、慰めにもなります。
この幾千行の詩句の背後には
一つの命が花咲いているのです。かつてそれは甘美だったのです。

こんなつまらないものにかまけたことを
追求されたとしても、私たちは、
今夜飛んだ飛行士よりも、

血にまみれた痛ましい大軍よりも、
この世界の偉大な支配者たちよりも、
かるがると自分の荷物を背負っているのでしょう。

「ヘルマン・ヘッセ　この詩集を持った友に」より

01

ジミー＝サロメ・レッドファントムは魔界の悪魔、夢魔の男爵家に長男として生まれた。

赤い髪は父に似て、緑の目は母に似た。

姉のアメリー＝レッドファントムはこの時すでに百歳を超えていたが、歳の離れた弟をこの悪魔の家族は心から祝福した。

彼に悪意の祝福あれ。すべての悪魔に愛されて、すべての人間に等しく好かれる悪意となれ。

よくある名前をつけた悪意は愛されるというジンクスから、平々凡々にジミーと

いう名前を授かったという話はのちのち母から聞いたものだ。
父の立派なヒゲの生えた口でキスをされるととても顔がちくちくしているのを覚えている。
姉のアメリーは自分が物心がつく頃には男色家の話を読むのを趣味としていた。それ以外はとてもやさしい姉だった。
ともかくジミーは、悪魔の家庭でとても愛されて育った。
悪魔に愛情などないと言われているのが一般的だが、レッドファントム家の主である父はきちんとした悪意はきちんとした栄養をとらねばならないとせっせと愛した。
「ジミー、お前はよい悪魔になるのだよ。よい悪魔とは、最大級の苦痛を人間が耐

えうる耐久性ギリギリでかけ続ける悪魔だ」

父は優しくジミーにそう教えた。

ジミーは人間から正しく憎しみを摂取する方法を学び、せっせと品位の高い悪魔へと成長をしようとした。

父はジミーを深く愛した。しかしジミーは途中から自分が悪魔であることに疑問を感じだした。

父が課題にした悪意の歴史も、悪夢法典を覚える授業もサボりがちになった。

執事のラーイが「そんなことではご主人様のような立派な悪魔になれませんよ」と説明したところで、ジミーは首を横にふるようになった。

ジミーは自分で考えだしたのだ。

よい悪魔ってのは、もっとこう、よいことをするのだろうと、漠然と。
よいことが何かもわかっていないのに、漠然と悪いことを頭ごなしに否定しだしたのだ。それは当然、父から見たら困った子供にしか見えなかった。
「お前は悪魔なのだから、人間になることも天使になることもできない」
と説明したところで、ジミーは自分のことを悪魔だと認めたがらないのだ。
父は息子が悪魔の自分を愛せなくなるのではないかと心配で仕方なかった。ジミーが悪魔の自分を否定したところで、ジミーは悪魔なのだ。息子が自身を否定する姿は、父から見たら身を切るほどの辛さがあった。
「育て方が悪かったのかしら」
どこの親でもそう悩むことがある。

「お前が悪魔であることを否定したところで仕方がないのだよ。ジミー、悪魔の自分を愛しなさい」

そう教えたところで、幼心にジミーは否定し続けた。それは彼がティーンの年齢になっても続いた。二十歳を超えても続き、百歳を超えるあたりまで反抗期は続いた。

父はもう諦めた。

「悪魔の家庭にこんな息子が生まれたのは、何かの縁だろう。お前は悪魔として失敗しているが、何かで成功するかもしれない」

父はジミーが悪魔として欠陥があることも祝福した。

母は立派な悪魔に成長しなかった息子に心底悲しんだが、それも百年経つ間に、

もうこの子に何を言っても仕方がないだろうと思うことにしたようだ。
アメリーは古今東西の同人誌を書斎に集めることのほうが、弟の心配よりもずっと大切だった。
父の悪魔である自分を愛して欲しいという願いは届くことはなかった。
母の並の悪魔程度の悪意は持ってほしいという願いも届くことはなかった。
ジミーはある程度の年齢まで清らかな心で成長してしまった。他の同年代の悪魔たちに変人だと馬鹿にされて、悪魔たちとは馴れ合えないと思って人間界に遊びに行くようになった。
悪魔の品位ある貶し合いよりもずっとルールのない人間たちの貶し合いをすぐそばで見ながら、いつか自分の理想に叶う相手が現れるのだろうと夢見ていた。

そうしてその相手は案外すぐに現れた。

◆◇◆◇

イスカリオテのユダも、弟殺しのカインも赤毛だというのは本当だろうか。

だとしたら自分は何を裏切り、何を屠ってこのような髪の色に生まれたのだろう。

鏡を見るたびに自分を育ててくれた父を思い出す。父の髪は炎のように赤い。そしてレッドファントム男爵と呼ばれている。

悪魔たちは夜に働き昼間遊ぶ。

ジミーも例にもれず、夜に魔界で百時間働き、昼に人間界で十二時間遊ぶ。

指が痛くなるようなペンを動かす作業にはやがて慣れたが、それでも書類の内容には眉をひそめることが多かった。

レッドファントム男爵は悪食のベルゼバブの配下にいる悪魔だ。

つまり悪夢とは、夢魔たちにとってこの上もなく美味な食事だ。

ジミーも生まれて間もない頃から、悪夢がどれだけ美味かを教えられた。

悪夢とはどれだけ人を痛めつけても現実に影響がさほど出ない。そして人間の苦痛をたくさん食べることができるという、最高のフィールドなのだと教えられた。

アメリーは男に淫夢を見せるのが大好きだ。男の罪悪感はひとしお美味しいのだといつも言っている。

さて、話を戻すとしよう。ジミーは毎夜百時間働き、十二時間昼間に遊ぶ。

ジミーは昼間に人間界で美しい景色を見るのが好きだった。

南の海はエメラルド色でとても美しいと思ったし、南米の滝は荘厳だと感じた。砂漠の静謐とした空気も好きだった。雪国の凍てつく空気ももちろん好きだ。

何より好きだったのがイギリスの田舎の景色だった。イギリスの庭は芸術的だと感じる。

こんな場所にずっと住んでいられたらどんなによかろう。

そう思って田舎に小さな家を建てた。

その地方では夏至の時期に苹果でワインを作る習慣があった。夏至祭と呼ばれる日に、収穫を祝い乙女たちが歌ったり踊ったりする地域だった。

ジミーがシャルアンティレーゼという女性を見つけたのはその時だ。
十六歳になったばかりのその少女は、踊り疲れて苹果の木陰で眠っていた。
田舎娘の格好だった。顔は煤けていたし、足は裸足だった。
それでもジミーがその少女に一目惚れするのには十分すぎた。
なんと美しい魂だろう。
今まで美しい女性、永久に美しい魔女や悪魔はたくさん見てきたが、こんなに美しい魂をもつ人間をジミーは見たことがなかった。
その魂はクリスタルでできた雪の結晶のような核を中心に、まばゆいばかりのやわらかな光を放ち輝いていた。
見惚れてずっとその場に立ち尽くしていたジミーの目の前で、彼女は目をこすっ

て起き上がった。
そして寝惚けたまなこでジミーを見上げて、目をぱちくりとさせた。
「あ、いや……」
こんなときどう言うべきなのだろう。綺麗な魂だね。と言ったら変な人だと思われるし、顔を褒めるのも違う気がした。
「何か、ご用事でしょうか？」
透明感のある、氷をグラスにぶつけたような音色の声で首をかしげられた。
ジミーの心臓は高鳴り、どうすればいいのかわからず言葉に詰まった。
「そのお召し物から高貴な方と見えます。もしかして村のはずれに住んでいる貴族様でいらっしゃいますか？」

彼女の言葉に思わずこくりと頷く。
ここまで言葉が出て来なかったことが初めてで、ジミーは内心変な人に見られないか焦った。
「村のはずれに住む貴族様、私はシャルアンティレーゼと申します。もしご用事がないのであれば、私はお暇したいのですが、何かありましょうか」
「君と話がしたい」
足早に去ろうとしたシャルアンティレーゼに早口でそう言った。シャルアンティレーゼは驚いたような顔をして、そのあとはにかんだ。
「ではお話をしましょう。名前を教えてください、貴族様」

02

◆◇◆◇

それは月の綺麗なハロウィンの晩の警備をしていたときだ。

「ハローハワユ？　警備のオニーサン、寒い中ご苦労さんです」

グリードは目を細めた。

カボチャのかぶりものをした変質者が近づいてくる。

へらへらと笑ってはいるものの、手には銀色の輝く刃物が見え隠れしている。

グリードは静かに警棒をベルトから引きぬいた。

「パーティー会場に入る前に身分証明書を見せてもらおうか」

「無粋なこと言うなよォ？　オニーサン、死にたくないだろ。俺だってパーティー楽しみたいんだよ」

大仰に肩を竦める仕草、右手で弄んでいるナイフはかなり大ぶりだ。

気付かれぬように重心を軸足に移動させながら、グリードはかぶりを振る。

「そうか。残念だがお引き取り願おう」

カボチャ男はナイフを引きぬき、地面を蹴る。

早い――！

防御体制に移るまでそれほど遅れはとらなかったが、その瞬間カボチャ男は宙を舞った。

「オニーサンの悲鳴は何色かなぁあああああああ！！！　ヒィイイイイホオオオ

オウ！」

振り下ろされる大ぶりの刃物。それを警棒で弾き飛ばす。

カボチャ男は素早く地面に着地すると、グリードと間合いをとった。

「警棒だけで俺に勝とうってか？」

こっちは刃物だぞと言いたげだ。まるで中学生だ。

「警棒だって手加減できなきゃ死ぬんだぞ。帰れ」

「いいじゃん、殺し愛ましょう。俺はあんたの肉に手をつっこむの考えるとちょっとぞくぞくするぞ」

げんなりする発言には目を細めるだけで返事はしなかった。

「おい、聞けよ」

カボチャ男は挑発にグリードがのらかなったことに機嫌を損ねる。
長い間相手していたい奴ではない。
一人で戦うのは危ないかもしれないが、大声を上げて近くにベアがいるとは限らない。
「じゃあ来いよ。叩き割ってやる」
グリードは警棒を両手で構えた。
「ヤッていいってことだよな。いい悲鳴で鳴けよ、ヒャッハー！」
今すぐ投げ出したい気持ちを押し殺し、切りかかってくるカボチャ男に集中する。
ナイフが横切るのを見極め、避けた。

カボチャ男が切りかかった瞬間、カボチャ――頭部を強打する。
カボチャはぱこーんと間抜けな音を立てた。
「お……」
カボチャ男の動きが脳震盪で止まる。
続けざまに後頭部にもう一撃カボチャに食らわせた。
カボチャ男はよたよたとしながら、後頭部を触って、カボチャのかぶりものをつけていてもわかるくらい動揺しているように見えた。
「おい、なんかカボチャにヒビ入った音したぞ？」
「言ったはずだ。手加減しなきゃ死ぬぞって」
「お前化けもんか。バケモンなんだな！？」

失礼な。化物と言うならお前のほうが奇妙な姿をしているだろうに。
「よくわかんねーけれど、ハロウィンの秩序を乱すような奴は帰れ」
次は頭を叩き割る。そう言わんばかりに警棒で空を切った。
「くそ、覚えてろよ」
最後の言葉まで三流悪党だなと思いながら、こいつの名前を聞いておくべきかもしれないとグリードは考えた。
「覚えておいてやるよ。名前は？」
ヒビの入ったカボチャはこちらを振り向き、首をかしげる。
「切り裂きカボチャ」
そうしてカボチャ男は闇へと消えた。

文字通り消えたのだ。跡形もなく。本当に化物だったのはあっちほうだ。

「ジャック・ザ・リパーとジャックオーランタンで切り裂きカボチャってすごいネーミングだな」

気持ちの悪いカボチャだった。

なんだったんだろと思いつつグリードは警備に戻った。

03

◆◇◆◇

キャラメリーゼのカスタードタルト、タルトタタン、田舎風アップルパイ、ニューヨークアップルパイ、クランブルアップルケーキ、アップサイドダウンケーキ、ヴァニラ・アイスにリンゴのフィリングを混ぜたもの……

見事にリンゴづくしのテーブルの上で、目をきらきらとさせている妖精をジミーは見た。

包丁を片手に、ちまい妖精、ユアを見る。

「本当に食べきれるのか？」

「食べるに決まってるじゃない。当然よ！」
「おう、ならいいんだけど」
俺でも食べきれないぞと思いながら、ジミーは彼女が食べやすいようにパイにナイフを入れて切り分けた。
ユアは小さな口のどこにそんな顎の力があるのかという勢いでりんご料理をどんどん口に運んでいく。
ジミーは近くにあった一切れのタルトを口に運び、紅茶を口に運ぶ。
「ちょっと、ジミー！　私の分なのよ」
「わかってるよ。これ一切れだけだって。そんな甘いもんはたくさんいらん」
タルトの上にアイスクリームをのせて口に運び、ジミーは考える。

こんな甘いものは一切れもあれば十分おなかいっぱいだ。
一生懸命小さな口でりんごと格闘しているユアを見て、ジミーはふと呟いた。
「りんごってさ、白い花じゃん？」
「うん？」
口に食べかすがいっぱいついている顔でユアが顔をあげる。
ジミーはどう言うべきか考えあぐねた挙句、近くにさしてあった花瓶からひとつ、りんごの花を摘んだ。
「可愛い可愛いユアちゃんはお花の妖精って言うらしいし？　これくらい可愛いお花も似合うんじゃないかって思っただけ」
ナイフで先を割り、簡易な白い花の簪をつくってユアの髪を結ってみる。

彼女の髪を引っ張り過ぎないように気をつけたが、やはり強く引っ張りすぎたようで彼女の顔は邪魔だとばかりの表情だ。

「できたよ。ほれほれ」

鏡がなかったから、よく磨かれたナイフの表面を向ける。

やや身じろいて、ユアは鏡に映る自分を確認した。傷つけるつもりは今はないのになあと思いながら見ていると、今度は刃物だということも忘れて張りついている。

「可愛いじゃない！　もらってやってもいいのよ」

ジミーは小さなユアのいばりんぼな姿にちょっと苦笑いを浮かべた。

通称図書館――。そう呼ばれる、各世界の本が蒐集されていると言われている、大きな図書館がある。

ワイズ・エッグ・ライブラリィ。

賢者の卵と名付けられた図書館には今日も学徒や本好きの人間で溢れかえっている。

ジミーは腹いっぱい食べてテーブルに丸くなって眠っているユアを見つめる。

ユアの頬を軽くつつく。

ユアはりんごと間違えてかぶりついたようだが、すぐに味が違うと思ったようでぺっぺとされた。

そしてまた眠りにつく。

完璧寝ているなあと思いながら、こんな小さな生き物の命を奪っても楽しくないなあと思った。

仕方ないので上から紙ナプキンをかけておく。

彼女が目を覚ましてもすぐにジミーの姿がわからないように。

ぼう、と紫の炎に包まれ、こつ然と宙に姿を表したカボチャ。

ジミーの家に伝わる呪われた道具の一つだ。かぶると記憶がなくなるかわりに楽しい気分になる。

ジミーはこれをかぶっているときに自分が何をしているか薄々知っていた。

だけどもうかぶるのを止そうとは思わなかった。
ジミーはカボチャの誘う楽しい気分に酔いしれるのが好きだ。なんでも出来るような万能感、望みが叶うという昂揚感、何者よりも優れているという優越感。
欲望に体を預けるというのは抑圧された日常から開放されるようで心地よい。
「さあて、おやつの時間は終了だ」
包丁をまな板に突き立てて、かわりにナイフを握る。
「りんごみたいにざくざく斬ってくるわ」
「むにゃー」
ユアは今も夢の中。ジミーの変化には気づかない。
ジミーはカボチャをかぶった状態で振り返る。切り裂きカボチャとしてのジ

ミーが。

「頭から8等分にしてやりてえ」

しかしそんなジミーの言葉には気づかないようで。

「いってきます」

律儀にそんな返事をしない彼女に挨拶している自分がいた。

そんな律儀な通り魔。

04

「葡萄酒はわたしの慈悲だ」

そう呟いたわたしの言葉に、まだ若し頃の君はいとけない笑みを浮かべて

「ありがとう。感謝するわ」

と応えた。

「私からあなたにはパンを。愛をこめて」

シャルアンティレーゼの微笑はどんな豊穣よりも恵みだと感じた。

当時のわたしたちにとって、葡萄酒とパンのある食事はご馳走だったと言える。

何より同じ時間をいっしょに過ごすことはどんな料理にも勝る甘美なものだった。

シャルアンティレーゼと出会ったのは夏至祭の季節だ。
この時期、わたしたちの住んでいる地域では火の輪を燃やして女たちが舞い踊る。
踊り疲れて苹果の木の下で寝転がっていたシャルアンティレーゼを見つけたのはそんな時だ。
彼女の足は何もつけておらず、服は田舎娘だった。
髪の毛は今ほど手入れもされていなかった。顔はもっと煤けていた。
それでも一目で素敵な女性とわかったのは、彼女が彼女足り得たからだろう。
わたしはあの瞬間から彼女の虜になっていた。
苹果の木漏れ日の中でわたしに気づかず寝ている少女に恋をした。

わたしは彼女のために詩を書いた。
しかし彼女は詩など興味などなかった。
わたしは彼女のために服を仕立てた。
彼女は「こんな高価なものは」とやんわりと断った。
高価なものも素朴なものも受け取らない彼女に、ならば何が欲しいのかと質問してみた。
シャルアンティレーゼは城の中に咲いている、リコリスを指さした。
「甘いと聞きます。私はリコリスのお茶が飲みたい」
リコリスは当時、魔女の媚薬として飲むことを禁じられていた。

臆することなくリコリスを欲しいと言った彼女は魔法使いの末裔だった。
彼女の欲しがったものはリコリスの粉末、甘い苹果の育て方を書いた本。
そしてわたしに手紙を書くためにとペンと紙を欲しがった。
彼女からはじめて受け取った手紙はインクが滲んだりかすれたりして、まったく読めたものじゃあなかった。
「ごめんなさい」
と言う彼女に、字を教えるという口実ができた。
そして食事をともにする理由も。
彼女はわたしの用意した仮初の根城で好きな本を読み漁り、陽が落ちると蝋燭

の火を鏡で反射させて読んでいた。

真夜中になるとわたしの寝台の隣で毛布にくるまって寝ていた。

女と寝るのは当たり前になりかけていたわたしが、彼女を閨に誘うのをためらったのはあまりに信頼されていたからかもしれない。

月明かりでうっすらとしか確認できない彼女の寝顔は、もうこの頃は大人びていた。

ワインは慈悲、パンは豊穣。

これはわたしとシャルアンティレーゼの合言葉だった。

わたしはシャルアンティレーゼに望むものを与える、シャルアンティレーゼは

わたしに愛を与える。

シャルアンティレーゼの顔を幼いと感じた日から、彼女が大人びてきたと感じるまで、そう日数は必要なかった。

いや、本当に必要なかったのだ。シャルアンティレーゼは急激に年をとっていった。

わたしが彼女が誰かに呪いをかけられていると気づいたのはその頃だ。

「いいかい、可愛いシャル。君がいつどこで、魔女に呪いをかけられるようなことをしたかはわからない。だけどわたしは君のためになりたいんだ。だからその呪いを手放すと、わたしに委ねると言ってくれ」

シャルアンティレーゼの呪いを解くことなど、呪いの根源である悪魔の親戚の

ようなわたしには造作も無いことだった。ただし委ねると言ってもらわないことには手も足も出せなかった。

シャルアンティレーゼは聡明な顔で

「ジミー、あなたは人のフリをしているのよ。わたしの呪いを解いては、あなたは村人に殺されてしまいます」

と言った。馬鹿なことを。シャルアンティレーゼの美しさが奪われることが、この夢魔の肉体の死より重要だと言うつもりだろうか。

シャルアンティレーゼは何度頼んだところで首を縦には振らなかった。

美しいシャルアンティレーゼは若さを失うかわりにどんどん賢くなっていった。

シャルアンティレーゼはもはや昔の、無知で無垢な少女ではなかった。

はらりと、ミルクを注ぐ彼女の髪が一房垂れたとき、白髪を見つけたのが始まりだった。

わたしはシャルアンティレーゼを床に押さえつけて

「悪魔と契約しろ」と迫った。

シャルアンティレーゼはうんとは言わなかった。

夜になってもシャルアンティレーゼはわたしを許してくれなかった。

翌朝、シャルアンティレーゼは川へと水浴びへ出かけた。

お分かりいただけるだろうか。わたしはその晩、彼女を抱こうとしたのだ。

臥所に押さえつけたとき、初めて彼女の目が、言葉が、表情がわたしを全力で拒んだ。

わたしはシャルアンティレーゼの乳房を乱暴につかみ、喉から絞り出すように怒鳴った。

「お前を愛しているんだ！」

シャルアンティレーゼは首を縦には振らなかった。

彼女はこう言った。

「退きなさい悪魔よ。汝を私は欲しない」

わたしは彼女の領域を侵犯することをついに許されぬまま朝を迎えた。

シャルアンティレーゼの年の頃はその時三十路を過ぎていた。シャルアンティレーゼは処女だった。そして彼女の実年齢は二十を過ぎたばかりだった。

わたしを拒まれた事実よりももっと大きくのしかかったものは、彼女の目から

零れた涙だった。
あの時感動で泣く以外で彼女が涙を流すのを初めて見た。
涙ごときで動揺した自分に驚愕した。
拒まれたくらいで絶望している自分に愕然とした。
そして彼女は川へ行くといったまま消えてしまった。
追いかけようと思ったが、捕まえてどうするのだろうと思った。
閉じ込めるのか？　彼女が「うん」と言うまで。そうして留めた彼女の美しさが昔ほどの輝きを留めているだろうか。
シャルアンティレーゼは急激に老いていく。わたしよりずっと先に死ぬ。
その事実が若い夢魔だった頃のわたしには重くのしかかった。

何故、何故永劫を拒むのかと。
何故、何故わたしを拒むのかと。
その日わたしは彼女と出会った苹果の木の麓へと行った。
苹果は生っていなかった。そこには白い花が夜の風に揺れていた。
誰のことも責めていないとばかりに、可憐に。
苹果の花の甘い香りに慰められたあの日から、どれくらいの時が経ったのかわからない。
少なくともシャルアンティレーゼがわたしのもとを去ってから、わたしはずっと時を数えるのを忘れていたくらいだ。
老婆がある日、わたしの根城を訪ねた。

差し出された苹果に、思わず白雪姫の女王を彷彿とした。

「葡萄酒をくださいませんか。あなたの慈悲を」

老婆が待ち望んでいたシャルアンティレーゼだと気づくのにはそれで十分だった。

彼女はしわくちゃの骨のような手でワインをすすり、わたしは彼女のくれた苹果をナイフで剥いていた。

苹果はひとつしかなかったので、二つに割った。

子宮の象徴といわれる苹果は、女の骨盤のような形をしていた。

「ねえ、ジミー。私、あれから随分と生きたわ。老婆になってからもずっと、この姿で。案外死なないものね。若さなどなくても、誰も振り向かなくなっただけで生

きていくのには十分だった」

わたしはこの森から外に出ていなかった。シャルアンティレーゼがどれほどの時を老婆として過ごしたのかわからない。

「でも、私はもう人として生きられないみたい。あなたの家で学んだ黒魔術も白魔術も、すべてこの時代の人々の理解をはるかに超えているの」

「そりゃあそうだ」

「それに、私――お祖父様の遺品で集めなきゃいけないものを見つけたわ。でも悪魔と契約をするというのもつまらないと思うの。くだらない目先の利益のために、魂を売るようなことはしたくない」

「望まぬところだよ。わたしはシャルアンティレーゼの魂を食べたいわけじゃあな

い」

暴食の下位の夜喰い夢魔だったが、シャルアンティレーゼの魂まで食べたいと思うほど飢えてはいない。

「ジミー、私の肉体の老いを食べてくれないかしら。命を食べてくれないかしら。そのかわり今度はあなたが命を宿すの。そうして苹果の種が木になり苹果の実をつけるように、あなたは命の輪になる。私はあなたを育てる大地になる。あなたの実を腐らせて、また苹果にするための」

「つまりこう言いたいのか。わたしが悪魔を数百年降板して、シャルアンティレーゼがその間魔女になると。それで、最後は？」

「私はあなたがどんな形になったとて待っています。あなたが私を忘れていないな

らば」

「忘れたりするものか。いいよ、そうしよう。お前が数百年魔女をやっている間、わたしがお前のことを愛する気持ちを忘れていなかったら、そのときお前はわたしのものになるんだ。それでいいかい？」

シャルアンティレーゼはやっと首を縦に振った。

そうしてわたしは彼女の老化という悪夢を食べた。

わたしはそこから老いる身となり、ただの人となり、輪廻を重ねた。

シャルアンティレーゼと定めた契約の時まで、ずっと重ねた転生の中で、何度も恋をして、子を育み、真実の愛だと信じることを繰り返した。

苹果の木の麓で目を覚ましたわたしの傍らには、若い日と同じ姿のシャルアン

ティレーゼがいた。
「おはよう、ジミー」
しかし透明感のある彼女の声には幼さは宿っていなかった。
それに寂しさを感じながら、わたしも昔のように若さがなかった。
わたしは恋を飽きるほどした。シャルアンティレーゼは恋する気持ちを忘れていた。
「賭けはお前の勝ちだよ。シャルアンティレーゼ」
わたしはシャルアンティレーゼの愛にもう飢えてなかった。
浴びるほどの愛を今は感じていた。
シャルアンティレーゼは苹果にとっての大地であり太陽であり水だった。

「お腹がいっぱいだ」
「暴食の家臣がお腹いっぱいだなんて、あらあら。どのみちすぐにお腹が空くわよ」
「そうしたら君の愛を食べるよ。今度は君が慈悲をくれるだろう？」
「パンを焼くわ。ワインも美味しいものを用意する」
微笑む彼女を抱き寄せて、唇を重ねた。
昔、蠱惑的だと感じた口づけは、今は愛の証明にすぎなかった。

05

異空間に浮かぶ図書館を発見したのは、
随分昔、悪魔と天使が会議をするための領事館から帰路につく時だった。

ジミーの知る聖書の世界には天国か地獄しかないと書かれている。
ジミーは人間は死ねばそのとおり、天国か地獄に行ってしまう存在なのだと思っていた。
自分のように半永久の命ががあるわけではないのだと。
ならばシャルアンティレーゼの老いを食って人間になったときの自分が、何度も重ねたあの生まれ変わりはなんなのだろう。

東に生まれたときに聞いた輪廻というやつだろうか。
ならば人間は死んで、天国へいったきりの人間と、転生する人間がいるということなのだろうか。
悪魔に復帰したばかりで、同種の輩と馴染むこともできず、人間に対する疑問も湧いて、それでも日常はずっと続き、シャルアンティレーゼと頻繁に会うこともなくなっていた。
寂しいと思わなかったと言ったら嘘になる。
そんな時に、ジミーは異空間に浮かぶ図書館の扉を開けた。
「やあ。図書館を利用するならば利用者カードを作ってね」

当時はそんなに司書が居たわけではない。アーヴェントという秘書が図書館の利用の仕方を教えてくれた。

「ジミーは三百歳を超えてるのか。ならばシャルアンティレーゼくらの年齢かな」

アーヴェントがそうつぶやいた。

「ここにシャルアンティレーゼが？」

「たまに本を読みに来るよ。ローレンスを連れてね」

ローレンスって誰だ？　シャルアンティレーゼの恋人だろうか。

そんなことを考えて軽く嫉妬したのを覚えている。実際はシャルアンティレーゼの探していた魔法剣の一つだったということを知って死ぬほど安心したということも。

「ところで、君のお姉さんは魔界では作家だと聞くが」
アーヴェントにそう言われて、姉のアメリーが男色小説を書くのを趣味としていることを思い出した。
「いくつか本を融通してもらえないだろうか。館長のエテルはともかく集められるだけ本を集めたいんだ」
「姉に聞いてみましょう。だけど、わたしは悪魔です。あなたたちにとっては害虫のような存在だ。それでもここを利用してもいいのですか？」
アーヴェントは少しびっくりしたような顔をしたが、すぐに笑った。
「君は悪魔だということを気にしているんだね。ここでは人間か、悪魔か、それとも物の怪かなんてことは関係ないよ。図書館のルールさえ守って、本が好きでいて

くれるならば」

06

「図書館のルールなんてくそくらえだヒャッハー！！」

地面を蹴飛ばし、一気に警備のグリードまで距離を詰める。

グリードの警棒を避け、ブスリとグリードの腹を刺してやろうとした。

刺さった！　そう思ったところでグリードのパンチが頬に決まってジミーは紙のように空を飛ぶ。

真っ白になった。顎が砕けた、真っ白よ。

目が覚めたときにはカボチャは近くに転がっていなかった。

グリードに持って行かれたのだとしたら、取り返さなきゃと思い立ち上がろうとしたときだ。

隣に紫色のドレスがあった。

ジミーは隣でシャルアンティレーゼが静かに読書をしていたことに気づく。

「シャル……」

「起きたのね。ジミー」

何百年前から変わらない。シャルアンティレーゼは定期的に図書館に本を読みに来る。その時以外はどこで何をやっているのかジミーはよく知らない。

「カボチャ姿やチンピラモードが板についてきたみたいで驚いてるわ」

「イメチェンしようと思いまして」

「昔のあなたからは考えられない変化ね。ワインは慈悲だ、とかもう言わないんでしょうね」
「今でもシラフで言えるけどあまりガラじゃないな」
ジミーはシャルアンティレーゼの隣にどっかりと腰を下ろし直した。
彼女の読んでいる本はどこかの歴史書のようだった。
「相変わらず、魔法剣を探しているのか？」
「剣は今のところ５本見つかったわ。もう少しがんばればいいだけよ」
「何百年かけて５本か。ご苦労なことだな」
「ここ最近のジミーは他のお友達と遊ぶのに忙しいみたいだから、読書も捗るわ」
「寂しい」

ぴったりとシャルアンティレーゼの背中にしがみついてもシャルアンティレーゼは静かに本のページを捲るだけだった。
「まさか私にまだ恋しているわけじゃないでしょう？」
「俺シャルアンティレーゼのこと愛してるよ？」
「あなたの愛は恋じゃないわ。知ってるもの」
「ええ。特別な人に向ける親愛の気持ちです。恋じゃないですね、もう」
シャルアンティレーゼの肩をもみほぐしながら、ジミーはそう呟く。
「恋なんて長い間してないよ。最初で最後があんただ、シャル」
「占星術によると、あなたの星の生まれは一人の女にこだわりすぎて、次の相手を見つけられないそうよ。残念ね」

「残念じゃねーよ。お前に恋して恋のハードルが上がったんだ。シャルのせいだよ、シャルの」
「知らないわ。私だって恋は長いことしてないもの」
シャルアンティレーゼの髪の毛からはいい匂いがする。
だけど昔のように恋心を刺激されたりすることはなかった。
「シャル〜。俺にかまえよ、たまにはさー」
「この本を読み終わったらね」
「待つよ。どこか食事に行こう」
彼女との恋はもう終わったのだ。

07

図書館を見つけて、シャルアンティレーゼを見つけて、しばらくは図書館にかよった。というのも下心でだ。シャルアンティレーゼと話すきっかけが欲しくて。彼女の顔が見たくて。

「ジミー、私もう娘じゃないのよ？　プレゼントを買い与えればころっとついてくるような子供じゃないわ」

彼女が美術館に行ったとき、気に入っていた絵画を手に入れてプレゼントしたらそんな回答が返ってきた。

ならばどうしてほしいのかと聞いてみた。

「あなたのことは好きよ。でも、私は前も言ったとおりおじいさんの剣を探しているの。だからあなたと遊んでいる時間はないのよ。わかるでしょう？」

わかるでしょう？　は子供を我慢させるときの諭すような口調だった。

どっちが年上かわかったものではない。

おそらく、人間として生きていたジミーのほうが、今ではシャルアンティレーゼよりも智恵で劣るのだ。

「シャルアンティレーゼ。わたしは君のことを好いてるんだよ」

「知ってるわ。だから言ってるのよ、私のことを好きでいてくれてありがとう。でも私は忙しいわ。だからあなたに尽くしてもらっても応えることができないの」

シャルアンティレーゼはそっけない態度で廊下の向こうに行ってしまった。

追いかけるのもしつこい気がしてジミーは棒立ちしていた。
彼女のために買った絵画の行き先に困り、結局姉のアメリーにプレゼントすることにしたはいいが、彼女は芸術的な絵画に興味があるタイプの悪魔ではなかった。
もっと世俗的な雑誌のような絵のほうが好きだと言われたが、それでも自分の部屋にあるとシャルアンティレーゼのことを思い出しそうで押し付け返した。
頭の中にはいつもシャルアンティレーゼのこと。
嫌いなら嫌いと言って欲しい。
そしたら諦めることくらい努力しようじゃないか。
だけどシャルアンティレーゼは忙しいだけで嫌いなわけではなかった。
ジミーは三百年も自分の仕事を放棄して人間界にいた。それだけでも父親に怒ら

れる原因だったが、それからも件の魔女に構い続けている。
「魔女シャルアンティレーゼと付き合うのはやめなさい」
父にそう、何度も言われた。
「あなたはわたしが仕事をすれば満足なのですか」
反抗的な態度でそう聞き返すと、父は歯がゆそうな顔をして黙るばかりだった。
ジミーはそれから仕事をきっちりやってから図書館に出かけるようになった。それでも父はこちらに困ったような視線を向けてくる。
その意図もわからず、しばらく月日が流れた。
ある日、図書館に向かう途中に父が待っていた。

夢馬の馬車で揺られながら、いっしょに図書館へと向かった。
ジミーは大事な話があるだろうことに薄々気づいていた。それはシャルアンティレーゼに会うなという内容であろうことも。
「お前の想いに蓋などできないが、」
父のスタートはそんな内容だった。
「彼女がマリーンの孫だということは知っているだろう」
「ええ。それが何か？」
「マリーンの母親が夢魔と交わって生まれたのがマリーンだという伝説は覚えているかね？　そのため彼は寺院に預けられ、邪悪な心に染まることなく不思議な魔力だけを手に入れた。そう書かれていることを」

「つまり、同種族の誰かがマリーンの父親だと？」
「あれは私だよ」
言葉が一瞬詰まった。
ジミーの父親が、マリーンの父親でもある。
ということはつまり、ジミーとマリーンは兄弟だということだ。
「お前が恋している相手は、お前の弟の孫娘だ。お前がやってる行動がどれだけ気持ち悪いものかわかったか？」
賢いシャルアンティレーゼが魔法剣のことを調べているうちにこの事実に行き当たっていたとしたら。
もしそうならば、彼女はジミーを拒絶するだろう。

もしそうならば、彼女はそんな事実をジミーに告げたりはしないだろう。
「わかったかね。ジミー、彼女に恋をするのはやめなさい」
父親は申し訳なさそうにそう言った。
告げることができなかった父を責めることなどできなかったが、ただ一つだけ、なじるとしたら自分をどうして悪魔に産んだのかということだった。
どうせならマリーンのように自分も寺院に預けられればよかったのに。

父は図書館の近くにジミーを置き去りにして、また領事館へと向かってしまった。きちんとお別れを言ってこいということなのだろう。

ジミーはとぼとぼと歩き出した。

気持ちを察するがごとく、普段は晴れている図書館の幻の空が雷の音を鳴らす。

ざあざあと夕立が降ってきた。

ジミーは大声を上げて叫ぶと走りだした。

ほぼ無人に近い図書館の外を走りながら、頭の中で神をなじった。

「神よ。今まであなたの計画を疑ったことなどありません。あなたに悪魔の家に生

まれた息子としてずっと協力してきた！　納得がいかないこと全部我慢して悪魔として生きてきた！」

天に向って、大声で叫ぶ。

「何故、わたしなのです？　何故わたしがこのような試練を受けるのです」

幻の作った雨ではない、あたたかな自分の感情が目から溢れだした。

ジミーは天が答えてくれないことなど知っていた。神がこの声を聞いているであろうことも。

「嗚呼……」

水たまりの出来た地面に膝をついた。

ようやく歩く気力が出てきて、ジミーは立ち上がる。
ゆっくりと図書館の扉を開き、中に入った。
シャルアンティレーゼがいつも使っている第二図書室の前までの足取りが重たい。
「どうしたの？　ジミー。濡れてるわ」
ジミーはシャルアンティレーゼになんて言うべきか悩んだ。
どこかで彼女がこの事実を知らなければいい。そんな卑怯な気持ちさえ湧いて。
「シャルアンティレーゼ、お別れを言いに来た」
シャルアンティレーゼは目をぱちくりとさせた。

空はこんな日にぴったりの雨模様。図書館の中はお別れの日には最適の暗さだ。お互いの顔だって、あまりわからない。

「わたしは悪魔だ。もしかしたら何かになれないかと思っていた。だけどどうがんばっても悪魔だった。悪魔じみていた」

「何を言ってるの？」

「君に恋するということ自体が罪だったということだよ。マリーンの父親は私の父親だ。君は姪孫にあたる女性だ。孫に言い寄る爺なんて気持ち悪いだろう。なんで今さら知ったのか、ずっと知らずにいられたらよかったのに、過ちが起きる前に気づけてよかったと思っている」

シャルアンティレーゼはもう一度目を瞬かせた。

正直視線をあわせるのも辛いが、それでも最後の力を振り絞って向き合った。
「心に美しく響くものを愛して、正しく愛せれば、悪魔じゃなくなれると思ってた。思いあがりだよ、君に申し訳ないことをした」
「ジミー」
シャルアンティレーゼは本を閉じると、ゆっくりと椅子を立ち上がって、こちらに歩いてきた。
濡れ鼠のジミーを抱きしめてくれる。だけどいつものように抱き返すことはできなかった。
「あなた以外になる必要なんてないのよ」
シャルアンティレーゼはゆっくりとそう言った。

「あなたは悪魔以外になれないわ。何もかも捨てたとしても、それはあなた以外になりきるだけで、あなたは悪魔のままなのよ」

それでも、悪魔以外になれたらとジミーは望んでいたのだ。

叶わない願いだとしても。

「私、傷ついてないわ。あなたが真剣に私のことを望んでくれたことにも、あなたが私に事実を教えてくれたことにも。なんて言えばいいのかわからないけれど、でも……」

シャルアンティレーゼはため息をひとつつき、もう一度強くジミーを抱きしめた。

「辛かったわね」

ほら、居た。いつものシャルアンティレーゼだ。

悪魔だろうと、血縁だろうと、いつもと同じ眼差しで見ていてくれるシャルアンティレーゼが。
「わたしは悪魔以外になりたかったんだ」
「知ってるわ」
「それとは違う理由でシャルアンティレーゼに恋をしていた」
「そうね」
「わたしは、今でも悪魔じゃなかったら、何か変わってたのだろうかと考えてしまう」
「そうね」
「神が……わたしが悪魔だから罰したのではないかと」

「違うと思うわ」
「あるいは罪があったために悪魔に生まれたのではないかと」
「違うわ。違うわ」
「ふてくされてるな。今のわたしは」
「いいじゃない。ふてくされなさいよ、こんな日は泣いていいのよ。当事者の私が言うのもなんだけど、いっぱい泣いて、お腹が空いたらいっしょにスコーンでも食べましょう。夜がきたら眠って、朝がきたらいっしょに朝日を見ましょう。
私、ジミーに会えたこと全然後悔してないわ。あなたといっしょに過ごした時間、とても楽しかったもの。お別れだなんて言わないで。血がつながってても友達でくらい、いられるじゃない。昔も私、あなたに色々教えてもらったわ」

シャルアンティレーゼは小声で「愛してるわよ」と言った。さらに追加で、「心から」と。

「わたしも愛してるよ。シャルアンティレーゼ」

「初めて会った頃の気持ちに戻りましょう」

一目惚れだったんだよ、シャルアンティレーゼ。

その言葉はもう言えなくて。

ジミーはそっとシャルアンティレーゼの背中に腕を回した。あの頃とほとんど変わりない華奢な体と、大人びたシャルアンティレーゼの吐息を聞きながら。

09

「そうね。図書館でお食事でもいいけれど、たまにいは外で食事したいわ。ジミーの家に遊びに行きたいところだけど、私明日には行かなきゃいけないところがあるから遅くまでいられないわ」

「何が食べたい？」

「野菜ね。サラダじゃなく、煮てるものがいい」

「野菜が美味い地域に行こう。栄養のぎっしり詰まった……」

「ギリシャ料理とかよさそうね」

ジミーは図書館の扉を開けて恭しくお辞儀をする。

シャルアンティレーゼは優雅に扉をくぐって、ジミーはそのあとを従者よろしくついてくる。
「あなたのその紳士っぽい態度、久しぶりに見たわ」
「たまにはチンピラじゃない姿も見せようと思いまして」
「でもチンピラのあなたも好きよ。かわいらしくて」
こっちが年上なんですが。という理屈はもう通じない。彼女はもう何百年も生きている賢い魔女なのだから。
「ところでジミー、あなた最近悪魔としての仕事はどうなの？」
「夜はばっちり働いてる」
「すっかりお仕事大好きになっちゃったわね」

シャルアンティレーゼは微笑むと、最後にこう言ってきた。
「だけど人間には蛇を踏む権威が与えられてるのよ。やりすぎには注意してね」
「俺は悪魔だということを忘れたことは一度もないよ、シャルアンティレーゼ。大丈夫だ、人間は繁殖力が強い。悪魔が多少無茶をしても次は勝つよ」
ちょっと手ごわいほうがいいのだ。一度負けるくらいでちょうどいい。
ジミーはシャルアンティレーゼの手をとり、降り立った石の階段の上へとエスコートした。
「この上に美味しいトラットリアがある」
「相変わらず美味しいものをリサーチするのは早いわね」
細く長い階段を登っていると、シャルアンティレーゼが小さく「ジミー」と呼ん

だ。
そしてそのか細い体がかくんと倒れて、ジミーの腕の中に落ちてくる。
「転んだわ」
「わざとね」
「たまにはいいじゃない」
あの頃よりは茶目っ気のあるシャルアンティレーゼが悪戯げに笑う。
「童話の魔法使い程度の私をお姫様にしてくれたのはあなただけなのよ？」
「今でも迎えに行く準備はできてるよ」
「嘘つきね。あ、今の鳥、ナイチンゲールだわ」
シャルアンティレーゼがジミーの胸の中で顔を上げて鳥によそ見をした。

その瞬間、ジミーはシャルアンティレーゼを抱き上げる。
まるで教会をくぐる新郎新婦よろしく、そのまま抱き上げて階段を登った。
シャルアンティレーゼは楽しそうに笑ってジミーの首に腕を回した。

こんなつまらないものにかまけていた自分を笑わず愛そう。

昔の恥を暖かく受け入れよう。

もし、あなたが自分のやっていること、感じていること、考えていることが、またはかつてそうであったことが、くだらないものだと感じたとしても否定しないでおいて欲しい。

今のあなたがいるのは過去のあなたがいるからだ。

ほんの少しの些細な出来事が許せずに、許せないくせに許してほしいと感じている自分が居たことを否定しないでほしい。